

【Ⅱ】 群れて咲く蝶の花

銀杏の葉が散るさまを「小さな鳥の形」と言ったのは、与謝野晶子だったろうか。実に言いえて妙である。マメ科の植物はどれもこれも小さな花だから、小鳥というわけにはいかないが、旗弁(ハタベン)と翼弁(ヨクベン)の形が、どこことなくチョウチョに似ている。しかも小さな花が房状に群れて咲くものが多く、なかなか可憐である。しかし美しい花が多いわりに、あまり庭には植えられていない。我々自身もマメ科の花を知らなすぎるのかも知れない。しかし春から夏にかけてマメ科の花は次々に咲き誇って、エンドウの様な独特の実を結ぶ。花スオウしかり、エニシダしかり、フジしかり、本家本元のスイトピーしかり…。

もともとマメ科の植物は極めて種類が多く、世界には約 650 属 18,000 種が分布している。しかもこれらの植物は人間が栽培農業を始めたときから、人間の食料とされてきたものも少なくない。我が国では福井県の鳥浜貝塚からリョクトウと、ケツルアズキと思われるものが縄文前期よりも更に古い地層から見つかっており、これは今からおよそ 5,000~6,000 年前のものと思われる。またダイズもアズキも、「死体化生神話(シタイケショウシンワ)」として『古事記』にも記されている。つまり食物を司る女神であった『大気都比売』(オオゲツヒメ)は『須佐之男命』に殺されたと伝えられており、その死体の「陰(牝=女性の陰部)には麦が、尻には大豆(マ)生(け)りき」と記されている。一方『日本書紀』でも『保食神』(ウケモチノカミ)が『月夜見尊』(ツクヨミノミコト)に殺されたことになっており、死体から同様のものが生じたと記されている。この類の物語は世界のあちこちにあり、おそらく豊饒と子孫繁栄の思想が一つになったものであろう。しかし見方を変えて、大気都比売や保食神を『大地』そのものと考えれば、しごく納得の行くあたりまえの話ではある。

また節分に大豆(08-01-11 参照)を鬼に投げつけて厄を祓う風習は全国にあり、年の数だけマメを食べると健康でいられると信じられていた。蛋白質や脂肪分を多く含むマメは、栄養価も高く、動物蛋白が不足がちだった時代、健康を維持するためには欠かすことのできないもので、こうした祭りは健康維持に対する一つの教えだったと見ることもできよう。

※旗弁と翼弁=蝶形花では一部のネムやジャケツイバラを除いて、上部に大きな旗弁(flag)を持ち、その下には2枚の翼弁(wing)が、さらに翼弁に挟まれるように2枚の竜骨弁(船弁とも言うため keel という)があり、これがマメ科の特徴にもなっている。植物の花や葉の構造や名称等に関しては[植物の用語集図説]をご覧ください。



見事に咲いた紫フジ(群馬県藤岡市総合運動公園)。



軽井沢の春は5月の連休の頃で、この頃に桜の花が開花する。やっと木々が芽吹き始めるが、まだ動物の食料はそうそうない。去年の秋に実ったクリや胡桃の残りをあさって、しばしの飢えをしのご。このためサルは町へ出て、観光客にエサをねだることも多く、子育ての時期でもある。

この項に記されている植物のリスト

【Ⅱ】群れて咲く蝶の花	02-02-00-1
1) ハナズオウとスオウ＝花蘇芳と蘇芳	02-02-01-1
2) エニシダ＝金雀枝	02-02-02-1
3) スイトピー＝麝香豌豆	02-02-03-1
4) クローバー＝詰草	02-02-04-1
5) ルピナス＝昇藤	02-02-05-1
6) エンジュ＝槐樹	02-02-06-1
7) アカシア	02-02-07-1
8) ハリエンジュ＝針槐樹	02-02-08-1
9) バラアカシアとカスケード・ルージュとキングサリ	02-02-09-1
10) フジ＝藤	02-02-10-1
11) ジャケツイバラとサイカチ＝蛇結茨と皂莢	02-02-11-1
12) クララ＝苦参	02-02-12-1

目次に戻る
